

## 服装から見えてくるジェンダー規範

### Gender Norms Inconspicuously Held in Clothes

加藤 歩\*・岩田 和男\*\*

**要約** 就職活動では、自然と「女性＝スカートスーツ」というイメージが定着してしまっているが、そこにはそれが自然と感じられる何かの力、強制力が働いていると考えられる。本論の目的は、その背景に何があるのかを様々な方向から検証することにある。

**キーワード** スーツ、パンツ、スカート、就職活動、男性目線、固定観念、イデオロギー、ジェンダー、制服、ネクタイ、近代性、標準、エレガンス、私服、監視、共犯、社会進出、子ども

#### 序論

就職活動時の服装は、一般的には男女ともスーツであるが、女性の場合、パンツスーツ、スカートスーツの両方が考えられるにも関わらず、スカートスーツを着る人の方が圧倒的に多い。

多くの女性は、特に決まり事はないのに、説明会の時はパンツスーツを着用し、面接の時はスカートスーツを着用している。面接・説明会のどちらもが、すぐに移動しなければならない場所があるので、わざわざスカートを選ぶということは、動きやすさで服装を選んでいるとは考えにくい。また、普段はパンツスタイルを好み、ほぼスカートを履かない女性でも、就職活動になると決まってスカートスーツを着ている。

本論のアイデアが生まれた時、加藤はまだ就職活動をしていなかった。先に控えている就職活動で、どちらのスーツを選ぶべきなのかを考えていきたいと思って決めたテーマだが、どうもそんな単純な話ではなさそうだ。ごく自然で気づかないけれど、自分の意志だけではない何かによってスカートスーツを着るように動かされていると考えられるからである。したがって、本論はその目的

を、その強制力の背景に何があるのかを様々な方向から検証することに据える。

#### 第一章 「女＝スカートスーツ」のイメージを定着させた要因とその影響——就職活動時の場合——

パンツスーツが女性にとって一般的にならない一因には、男性の目線を気にすることがあるのではないかと考えられる。また、男性が女性のあるべき姿（服装）のイメージを固定してしまう理由もあるかもしれない。

アン・ホランダーは、『性とスーツ』で

今まで見たとおり、今世紀の前半、女性が男性のやるように実験的に装っている間でさえ、いかに強固に性的な慣習が守られてきたことか。男性と女性のよりラディカルな平等の形を衣服で表現するためには、単に女性に男性のスーツを着せるだけではならず、もっと何かを加える必要が最近出てきている。それだけでは、男性の支配に屈するという雰囲気、最後につきまとい過ぎるのである。昔ながらのコケティッシュなかたちをとって、遊びのようにな

\*総合政策学部総合政策学科2012年度卒業生(08G084) \*\*総合政策学部教授

されない限りは、だ。タキシードであろうと、ネクタイつきのパンツスーツであろうと、伝統的に男性のものであった衣服にそっくり身を包む女性というものは、依然として女の挑戦という古い色合いを帯びる。それはそれで魅力的だが、男女同格の立場を暗示することはまったくない。(235-236、一部訳改変)

と述べている。女性の服装(ドレス)は男性のスーツを模倣して生まれたために、「パンツスーツ＝男性のもの」というイメージができてしまっている。

このイメージは、21世紀の現在でも様々なところで見られる。『女子学生就職活動の秘訣』には、女性が就職活動を行う上での様々なアドバイス・注意点が書かれている。例えば、スーツの色、髪の色についてだ。これらは男性、女性の別に関係なく、どちらもが気をつける必要がありそうだし、女性の為の本があるのなら、男性の為の就職活動の本もあってよさそうなのに、インターネットで調べた限り、そういうものはなかった。それはさておき、上記の本には、服装について次のようなことが書かれている。

目立つ服装は、マイナス評価につながる場合が多いので、ここは、無難な服装でまとめておくことをおすすめします。スカートの丈は短すぎず長すぎず適度な長さで、座った時にちょっとひざが見えるくらいを目安にします。(ページ数不明)

スカートについては事細かに書かれているが、パンツスーツについては一言も述べられていない。また、この文章の横にスーツを着て立っている女性の絵があるが、これもスカートをはいた女性のみである。ちなみに、この本を書いたのは男性である。

上記の文章から、無難な服装＝スカート(しかし長さに気を付けなければ、無難でなくなる)、

目立つ服装＝ズボンなのだと考えられる。やはり、男性の模倣から始まったズボンを女性が着るということはまだ男性は受け入れられていないのだろうか。その結果、就職活動(特に面接)で女性は男性視線を気にしてしまうのではないか。

「福井の理想の女性像は『家庭大切にする人』商議所調査」には、福井男性からみた理想の女性についてのアンケート結果が書かれている。これによると、男性は「ぼつちりして、飾らない」女性が理想らしい。「外見では髪が長く、ミニスカート」で、「ローヒールの靴を履く人を好む」そうである。

このアンケートに答えた男性の平均年齢は32.9歳と若い。女性のあるべき姿にスカート姿という服装のイメージが96年当時の男性の中にはしっかりと残っていることがわかり、ホルンダーの指摘が普遍性を持つことを確認できる。女＝スカート姿のイメージは、昔から現在まで大きく変化していないようだ。

就職活動の面接には、中年から年配の男性が多くいることだろう。上記のアンケート結果が示すように、30代前半であっても女性＝スカートのイメージがしっかりと残っているのであれば、中年・年配の男性ではさらにそのイメージ通りにすべきという考えは強いことだろう。女子学生がパンツスーツで面接に来たら、その違和感は測り知れないのかもしれない。

事実、日常生活での服装に何かを言う人ではない加藤の父(当時65歳)は、数年前に大学で行われたセミナーに参加するためスーツを着る機会が加藤にあった時に、動きやすいのでパンツスーツを選んだところ、「えっ!スカートじゃないの? いいの?」と言った。加藤の父の中にもまだ「女＝スカート」という考えが残っていた、いい証拠である。

引用されている記事が、現在から既に17～18年も経過しているから、古い情報ではないかというもっともな懸念もありそうだが、固定観念とい

うものはそれほど極端には変化しない。「イブニングユース データウォッチング 雇用機会均等法の改正後 根強く残る固定観念」という、1999年の男女雇用機会均等法改正前後の「男女の人間関係」を比較した記事がある。全文を引く。

男女雇用機会均等法の改正後、は変わってきたのだろうか。

情報誌「ケイコとマナブ」のOL総研が行ったアンケートを紹介しよう。（平成11年1月、読者会員300人に調査）

女性社員に対する男性社員の態度・考え方に「満足している」と答えた人が57・7%、「不満である」と答えた人は42・3%だった。「不満」の理由として「女性への仕事の与え方」「プライベートなことに口をはさむ・セクハラをする」などが上位に入った。

次に職場以外で、女性に対する男性の態度・考え方では「満足」74・5%となっており、仕事抜きだと満足度が高いようだ。「不満」の内容は「理想の女性像を押しつけてくる」がダントツの18・6%。次いで「女なら家事・料理ができて当たり前」など。

これらを見ると「女というものは、かくあるべきだ」という男性の固定観念に対する反発が強く感じられる。それは「女の仕事はこの程度」「女はお茶くみ」という職場に根付いた固定観念にも通じるのかもしれない。

ここから加藤は、女性は、男性が持つ女性に対する「固定観念」や、「理想の女性像を押しつける」ことに不満を持っていることがわかると、記事内容をなぞるが、岩田は、この記事には気をつけなければならない点があると考え、というのも、これを書いた記者には、86年に制定された均等法から既に13年も経過しているという認識があるように思うからである。

ところが、アンケート結果は、案に相違して、満足のほうがそれでも多いこと、「仕事抜き」な

ら満足度はさらにアップすること、言い換えれば、想像以上に女性は男性社員の態度などを受け入れていることを示している。不満も仕事内容、無関係なことに「口をはさむ」、セクシャル・ハラスメントと、労働環境におけるジェンダー平等に関わるものであって、ある意味彼女らの不満は限定的、とも言える。したがって、記事最後にある『「女というものは、かくあるべきだ」という男性の固定観念に対する反発が強く感じられる」という付言は、「お茶くみ」に代表されるような、仕事内容に関して男が勝手に抱いている通念（イメージ）への反発なのか、男性がついとうっかりと暴露してしまう女に対するイデオロギー、女＝スカート姿が当たり前という無意識にあるジェンダー・イデオロギーへの反発なのかが、実ははっきりしない。

記者は、女性が思ったほど不満に思わないことにいら立っているのかもしれない。女性は「固定観念」に「反発」しているかもしれないが、それがそれほど「強く」ないものでもあることを、アンケート結果は結構示してしまっているからである。しかし、イデオロギーの強度は13年程度では微塵も揺るがない。これを、就職活動時の服装に置き換えて考えてみよう。「女性の就職活動はスカートが当たり前」という固定観念を男性が持っていたとして、女性がそれに疑問を持ったとしても、就職活動で反発することは到底できない。そんなことをしたら、就職できないかもしれないからである。それに、就職活動は、一年もすれば終わってしまう、一過性のことにすぎない。今だけ我慢すれば、と考えたとしても不思議でもなんでもない。年配の男性に出会う事の多い面接などでは、良いイメージを与えることがいい就職に直結するかもしれず、危険なパンツスーツではなく、スカートスーツを着用していくのは当然の選択ではないか。事実、加藤も、動きやすく活動しやすいから、説明会などはパンツスーツで行ったし、「女性＝スカートを着用すべき」という考えに不満を持っていたが、実際の面接当日はスカートスーツで出かけた。周りは、説明会の中からスカー

トが多かったし、スカートの割合は増えるばかりだった、というのが加藤の経験である。

実際の面接官が本当に女性のスーツの種類を気にかけているかはわからない。しかし、女性は面接官(主に男性)の視線を気にしてスカートスーツを選んでしまう。言い換えれば、「無難でありたい」という考えが私たちの根底にある。私たちは、これまで成長してきた過程で、「人(周り)と同じであれば安心であり、正しい」と考え、逆に、「人(周り)と外れていれば不安であり、間違い」と考えることが、自然と身についてきたように思う。

株式会社ジョブウェブ(Jobweb)が、ジョブウェブ会員学生93名に「服装自由の説明会は、私服で行くかどうか」というアンケートを行ったところ、55%が「全てスーツで行く」、41%が「時と場合による」、4%が「全て私服で行く」と答えたという。全てスーツ派とした学生が挙げる代表的な理由には、「服装自由でもスーツでいく人が多いようなので、無難にスーツを選ぶ」や、「スーツの方が浮かないから」がある。HPにも「無難という回答が多いですね」とコメントしてあった。一方で、全て私服派の学生に共通するのが、「服装自由」を字義通り解釈する傾向が強いことである。こういう学生たちが超少数派であることを考えると、大半の人は「服装自由」という説明を真に受けない、ということになる。

その点で興味深いのが、全て私服派の学生が挙げた「前後の予定の関係で大学に行くことがあったら、スーツだと余計おかしく見える」という理由である。一見すると、私服派、スーツ派は対立した意見表明のはずだが、理由をよく見てみると、共通点が見られるのである。それは、服装を考え選ぶ時に、周りからの視線を気にすることや、無難を選ぶのがスーツ派にも私服派にも共通して見られる傾向だということである。

このことから、私たちは、そこに書かれている文言よりも、「周りと同じ」であることを、自分はもちろんのこと、他者にも求めるのではないだ

ろうか。それこそイデオロギーであると岩田は言いたい。

## 第二章 制服を着る目的の男女差から見えてくる女性がつくるジェンダー規範

「周りと同じ」服といえば制服がすぐに思い浮かぶ。そこで、本章では制服について考察する。いろいろ調べる中で、加藤は大きな疑問を感じるようになった。男性は、社会に出て働く時であれ、就職活動であれ、スーツにネクタイをしめれば大抵はそれで良い。実際、就職活動に訪問した会社も女性は制服(+スカート)で、男性は制服ではなく、スーツであった。男女とも、働く場所が同じで、就職活動も同じなのに、制服を視点にしてみると、男女で大きな違いが出てくる。それはなぜなのか。

制服とジェンダーの奇妙な非対称に関して、「ペーパーナイフ 制服談議」という記事が同様の疑問を発しているのので、ここに引く。

【愛知県】なぜ女性の市職員は事務用制服を着ているのかー。こんな話題で男性職員らと盛り上がった。

稲沢市の制服廃止について女性職員に感想を聞いたところ「ずっとスカート着用には抵抗があった」とつぶやいたのがきっかけ。仕事内容や個人的な価値観などを考えれば、当たり前のような答えに、がく然とした。男だから今まで気付かなかったのか、と。

男性職員諸氏からは、女性の制服着用効果について、もっともらしい意見が次々と飛び出した。

「福利厚生の一環で、支給される便利な物」「着替えることで、仕事をする緊張感が生まれる」「だれが職員かひと目で分かり、来客に安心感を与える」

次第に「男はネクタイをした時点で仕事の顔に変わるから、制服はいらない」「女性は統一化した服を着た方が印象が良く、ふさわしい」



と言いたい放題に、

では、と質問した。「自分の所属長が女性で、事務用の制服を着ていたらどう思う」

私を含めた全員がひと言。「不自然だよな」。それぞれの心に潜む差別観がむき出しになったようで、皆、黙り込んでしまった。

お隣の市では、女性職員のみが制服着用を義務付けられている。男性職員も一時、ブレザーを着用していたが、不評で二十年前に廃止された。

だれのために、だれが作った制服なのだろうか。この市では制服のために年間数百万円の税金が使われている。制服廃止までは時間の問題だろうが、男性上位の考えが残るシステムそのものから、見直す必要があるだろう。（村瀬悟）

問題はもちろん「それぞれの心に潜む差別観」である。女性の職員だけ、制服着用を義務づけている職場はよくあるようだが、加藤を一番驚かせたのは、男性が考える「女性の制服着用効果」である。「仕事をする緊張感が生まれる」「来客に安心を与える」は理解できなくもないが、それは女性に限らず男性にも当てはまることである。とりわけ女性を呆れさせるのが、「統一化した方が女性は印象が良い」や、「男性はネクタイをしたら仕事の顔に変わるから」という意見で、加藤は全く理解できないと憤懣やるかたなしの態だが、すぐさま冷静になって、論点を、制服を着用したときの男女でのイメージの差や目的へと移す。

しかし、岩田はなぜ男性は「ネクタイをしたら仕事の顔にかわ」り、女性は制服でないと「来客に安心」すら与えないのか、もう少しこだわりたい。というのも、ホルンダーによると、男物のスーツには近代の特徴が象徴的に現われているというからである。

一八〇〇年頃以前の服飾史とそのあとの歴史を比べてみると、[男性]服の近代性、近代世界<sup>モダン</sup>の衣服を際立たせている特質がなにかよく見

えてくる。女性服はつねにインパクトの強い、ほとんど舞台衣裳のような視覚的主張をするのに対し、男性のテイラード・スーツは現実的な標準を設定するのだ。……一八〇〇年以降、女性服において徐々に進んだ「近代化」は、男性<sup>モダニゼーション</sup>の理想に近づこうと、そのモチーフをあこれ利用した歴史でおもに構成されてきたのである。（14、訳一部改変）

この後、ホルンダーは、この「現実的な標準」という「理想」が、「身体の一つの完全な外皮を提供」しながらも、「別個の……分断された断片でできている」（14）ことを重視して、矛盾した二つの要素が一つに融合しているところにスーツの近代性を見たとうえで、こう喝破している。

それ[スーツという衣装]は誰にとっても喜ばしい、特定の身体<sup>モダニゼーション</sup>の細部に固執しないのだから。それは、十八世紀後半の新古典主義の犬志から編み出された近代の審美的原則を反映している、ちょうど近代の民主主義衝動がそうしているように。また、それらと同様に（たとえば合衆国憲法に具体化されているとおり）、この衣装は自己永続的な秩序の理念も提示する。柔軟で殆ど無限に可変という理念である。（15）

男性がネクタイを締めただけで「仕事の顔にかわ」るのは、その前提としてのスーツ姿が、個体差という「特定の身体<sup>モダニゼーション</sup>の細部」という特徴に「固執しない」性質を有しており、「柔軟で殆ど無限に可変」でありながら、かつ「身体の一つの完全な外皮」ともなっていることによるわけだ。つまり、スーツは可変の「制服」なのである。

女性ファッションはその正反対と言っていい。「一八〇〇年以降の女性ファッションは、一貫してまったく異なる考えを示してきた」（15）のである。前掲引用にある「ほとんど舞台衣裳のような視覚的主張」（14）という表現にも明らかのように、「わざと見せびらかすこと（deliberate

display)」が「エレガンス」の特徴を「体現する」(15)以上、それが「身体の一つの完全な外皮」から成る「標準」を持つことはありえない。だから、女性は制服でないと、働いている人という「安心」を「来客」に与えられないことになる。14年ほど前の新聞記事にも当てはまってしまうところに、イメージの強度を読みとることもできるだろう。また加藤は、少し唐突気味に、就職活動時の服装に「女性＝スカート」という形ができたのかもしれないと、先ほどの市職員の制服に関する新聞記事の後でつけ加えているが、今確認したような、女性ファッションに近代的「標準」がなかったことを重ねて考えれば、それが誕生した時の「標準」と関わってくると見るべきかもしれない、別稿でのさらなる検討が必要だろう。

「制服を着る目的・効果の男女の違い」に関する加藤の議論に戻る。『制服概論』で酒井は、

男性にとって制服は、実像以上の凛々しさを演出するために利用するものです。それは、着てびっくり脱いでがっかり、という意味で両刃の刃的な服でもある。

対して女性の場合はどうでしょう。女性向けの制服が演出しようとするのは、凛々しさというよりも、ある種の純粋さであり、従属的な感じ、そして業者に対して忠実である感じ、です。

男性の服は、もともと持っている男性的な部分を強調するデザインになっているのに対し、女性の制服はレースクイーンとかコンパニオンとか特殊な制服ではない限り、女性的な部分や色気をことさらアピールしようとはしません。(77)

と述べている。つまり、男性にとって制服は、自分をより良く見せ、男らしさを強調するものであるのに対して、女性にとっての制服は、目立たせ、自分を表現するものではなく、忠実さを表現するためのものになっているのである。これを加藤は

真逆の結果と表すが、男性のスーツの近代性と女性の服装におけるその欠落に関するホルンダーの指摘を持つ今、「業者に対して忠実である感じ」がなぜ女性の制服に出るのがよくわかるはずだ。女性の場合は制服にしないと「標準」感が出ないからである。そして、そのように、男性のスーツと違って、統一の制服でしか標準に達することができないからこそ、制服を着た女性には「純粋さ」が出来し、そのことの窮屈さ、不自由さが「従属的な感じ」を女性に与えるのである。

そのことは、加藤の、これまでに制服を着て「大人っぽく見えるね」とは言われたが、「女の子らしいね」と言われた記憶はないという経験に通じる。また、私服から制服に着替えた時も、その印象があまり相手の心には残らない、という経験談にも通じるだろう。女性の服装は歴史的に見て「私服」に属するのだから。

逆に、男性の場合は「男らしいね」と言ったり、言われているのを見る機会は女性よりかなり多かったと加藤は言う。男性が、私服からスーツに着替えるととても新鮮で、凛々しく見えるとも言える。友人は、これを「スーツ・マジック」と呼ぶそうである。それはどのような男性にも当てはまるらしい。ところが、プライベートで会うと、普段のスーツ姿と印象が変わってしまう男性も多いそうだが、同様のことを、野球の帽子に見る人もいたことを岩田は思い出す。その伝でいくと、野球帽は制服なのかもしれない。

それに比べ、女性は、制服を着用しても相手には男性の制服ほど印象を与えない。女性は、制服を着用しても、びっくりもがっかりもされない。理由は既に見たように、女性の服装が本来私服にあって、女性の制服とは「働く女」という意味づけ以外にないからである。加藤は、ここでひとつ疑問を持つ。女性はなぜこのような状況に違和感を覚えないのだろうか。

加藤は、女性がこれまで過ごしてきた(過ごしている)過程に要因があるのではないかと考える。女性は、服装・行動・髪型・持ち物など、様々な

場面で女性らしさを求められる。小さな頃は親からそれを求められ、成長していくにつれて、それを求められる範囲が広がっていく。しかし、加藤の経験では、求められる事柄や行動がなぜ女性らしいのか、なぜそうしなくてはいけないのか理解できないこともあり、嫌な思いをすることもあったという。『オンナらしさ入門 (笑)』で小倉はこう言う。

……女の子は可愛がられてはいますが、「鏡の国」に閉じ込められているからです。「私は人の目にどう映っているんだろう?」「私は、女の子にふさわしいほど十分可愛いのだろうか?」

女の子は、二歳になるともう十分に、「自分」を眺める自分の視線を持っています。……女の子は、自分の身体は自分の持ち物なのに、どうして居心地が悪いだろうと徐々に感じ始めます。自分は自分の身体の王様ではない。自分は、他人の視線の中にある。……女の子には、「自分」しかありません。「自分」とは、鏡に映る「自分の表面」のことです。他人の視線に映る「自分」にしか、生きる場所はありません。(35-37)

ここからも、女性のほうが多くの人々、社会の目を気にしながら生活していることがわかる。男も誰かの視線を気にしながら生きているだろうが、女性はそれが特に強く、気にするべきでない部分でまで気にしているのかもしれない。「鏡の国」という表現が、女性の置かれている状況をよく表している。

それだけでない。同性である女性の影響も実は大きいのではないか。女性が女性に「女のくせに〇〇」と発言するのをよく耳にするからだとか加藤は言う。

加藤は以前、女友達とドライブに出かける機会があった。その友達は、真っ赤なスポーツカーに

乗っていて、女性二人がスポーツカーに乗っているのは目立つだけに、色々な人から声をかけられたそうだ。初めに会った男性数人のグループは、眺めながら「すげー! 女の子も意外とスポーツカー、似合うんだね〜」と友達同士で話していたらしい。それに対して女性のグループは、最初は興味ありげに見ていたものの、私たちから少し離れた場所に行くと、「女の子がスポーツカーって、なんかね……。パッソとか、かわいい系が普通だよね」と話しているのが聞こえてきたという。

他にも、様々な場面で、女性が同性に対して「女なのに、女のくせに」と言うのを聞くことがあるとか加藤は言う。自分も女性であるのに、なぜこのような言い方をするのか。加藤は、自分自身の目ではなく、「男性視線」で女性を見ているからではないかと推論する。女性はこうあるべきというのが、女性の中にも男性と同様にできているというのである。男性より女性の方が強いのかも知れない、とまで言う。

前掲書で小倉はこう言っている。

「みんな」の中に溶解した女子は、自分の輪郭というものを持たなくなります。

いくらでも「みんな」にあわせていくには、自分という独自の輪郭を持たない方がラクだからです。自分というものをもたないこと、いつも、その場の「みんな」になること、それが「女らしさ」です。「女らしく」する努力を止めないように、女子はお互いに監視し合っています。浮かないように、目立たないようにしながら、しかも、目立ちたい。(129-30)

この「互いに監視し合」う行為が、女性の服装選びにも影響を与えているのではないだろうか。そう加藤は指摘する。雑誌『ELLE JAPON』のECサイト<sup>(1)</sup>「ELLE SHOP」が25歳～39歳の働く女性を対象に行った「ファッションに関する意

(1) 《electronic commerce site》インターネット上で商品を販売するウェブサイト。(Kotobank.jp より引用)

識調査」によると、68.6%の女性がファッションに関して「男子ウケより女子ウケのほうが気になる」と回答したという。35歳以上では70.8%にのぼったそうである(RBBToday)。このことから、ファッションに関しても自分の近くにいる女性からの視線、あるいは「監視」が強く影響しているといえるだろう。加藤自身も、普段よく一緒にいる女性を意識して服装選びをしている部分もあるという。例えば、友達にできている自分のイメージと違う服装をする時は「どんな風に言われるのかな」と思ったり、友達が自分のイメージだと思っていないような、あまり派手なものは着なかったりする。友達同士での会話でも、相手の服装や見た目に関する話は頻繁にする機会がある、という。

女性は、男性以上に、色々な人から「見られている」ことを意識していて、そのなかでも、本当に意識し、恐れているのは、実は同性である女性なのだということが分かった。これらのことから、女性が就職活動時にパンツスーツを着用しない、着用をためらってしまう理由は、歴史的に作られた要因や、男性の目線・周りの目線を気にするなどの理由ももちろんあるが、女性からの影響もかなり大きいのである。

加藤は、こう結論して、さらに、女性自身が、自分で「女性だからこうあるべき」というのを作ったり、昔からあったそのような規範を強固なものにしているのではないかと、とまで言うが、これには岩田は賛成できない。というのも、この女性の「監視」とは、言うまでもなく男性の視線の代理だからである。つまり、「監視」することで、女性を男にとって都合のいい「型」にはめ込む作業に携わっているのである。有体に言えば、共犯関係ということだ。

### 第三章 社会調査(アンケート)

第二章までで、女性が就職活動時にパンツスーツを着用しない理由として、大きく三点を挙げた。一点目は、歴史的に作られた要因、二点目は、男性の目線を気にする、三点目は女性からの影響である。これらのことが、就職活動の服装や、日常生活での行動に影響を及ぼすのではないかと結論した。

社会調査では、就職活動の服装に対する男女それぞれの考え方を知り、どのような項目に男女差が出るかを加藤が調べた。また、今までは、就職活動時の服装にばかり着目してきたが、それだけでなく、日常生活での服装に対する考えも調査した。

アンケートは三部構成で、第一部は就職活動時の服装について、第二部は日常生活の服装や行動について、第三部は、スーツに対して持つ考え・印象について調査した。質問項目については補足資料を参照いただきたい。アンケートの実施は、2012年7月6日と10月5日の二日間、愛知学院大学日進キャンパス12号館で愛知学院大学の学生に行った。

#### アンケート結果からわかったこと

第一部の「就職活動の服装」についての基本的な意見を聞くためのアンケートであるが、それぞれの質問項目に対する回答数が異なったままである、示されている数値からの解釈が首肯できるものでないなど、不備があるので割愛する。唯一、「どのような服装で就職活動をするか」という質問に対する回答は、解釈も納得できるものとなっている項目がないわけではないが、大学何年生であるかを質問する項目があるにも関わらず、その回答分布がどうなっているのかに関する統計資料は示されていない。しかし、就職活動経験の有無が当該質問の回答に大きく影響するのは必定であり、自らの経験による回答であるのか、ただの想像・伝聞による回答なのか、岩田が判断できる状態に

ないので、やはり割愛することにした<sup>(2)</sup>。

第二部では、「日常生活での服装についての考え・行動」についてのアンケートを行った。皆の普段の服装に対する考えや行動が、就職活動時の服装にも影響しているのかもしれないと考えたか

らである。用いた解析ソフトは spss で、おもに t 検定を行った。有効な結果が出たものから紹介する。

「服装を選ぶ時異性を気にするか」という質問の結果は、次のようになった。

### 日常生活の行動・服装についてのt検定

性別		N	平均値	標準偏差	t値
服装を選ぶとき、異性を気にする	女性	81	2.25	.799	-2.99 *
	男性	167	2.59	.859	

この表から、愛知学院大学の12号館にいたことが多い男子大学生は、当該女子学生に比べて、服装を選ぶ時に異性を気にする傾向が高いと言える。加藤は、異性を気にする男子学生が多いことより、異性を気にする女子学生が少ないことに注

目する。この結果が、女性が異性より同性の目線を気にして服装を選んでいることの現れと考えることができるからである。

そこで次に、「大学生活で女性を気にして行動するか」を質問した結果を見ると、

### 日常生活の服装、行動についてのt検定

性別		N	平均値	標準偏差	t値
大学生活で、女性をきにして行動する	女性	82	2.46	.804	2.127 ***
	男性	169	2.23	.816	

当該女子学生は男子学生に比べて、同性である女子学生を気にして行動していることがわかる。小倉が「その場の『みんな』になること」が「女らしさ」だと言っていることは既に述べたが、実際の日常生活でも、女性は同性を気にして行動している傾向が強い。女性が本当に気にしているのは、いつも一番近くにいる女性なのかもしれない。

第三部では、「スーツに対するイメージや考え」について質問したが、ここで確認したいのは、スー

ツが持つイメージは男女それぞれで違うのではないかという仮説である。そのイメージの違いにより、就職活動ではスカートスーツを着用する女性が多いのではないか、というのが加藤の考えだ。実際の大学生はどのような考えを持っているのかを知るため、以下の質問をした。

「男友達がスーツを着用すると、普段より凛々しく男らしく見えるか」という質問の回答結果は、以下のようなものである。

### スーツに対するイメージや、考えによるt検定

性別		N	平均値	標準偏差	t値
男友達がスーツを着用すると、普段より凛々しく男らしく見える	女性	80	3.45	.593	2.25 ***
	男性	160	3.10	.737	

(2) ちなみに、スーツ203名、その他4名という回答結果で、就職活動はほぼ全員がスーツで行くということを改めて確認した、と加藤は結論づけている。この結論で大きな齟齬をきたすことはないかと岩田も考えるが、経験上、実際の就職活動経験者がスーツ以外の選択をするとはほぼ考えられず、4名の存在に上述の情報不足が関係している可能性を排除できないので、やはり割愛が相当と判断する。

スーツ着用だと、普段より凛々しく男らしく見えると考えている女子学生は、男子学生より多いことが言える。女性は、男性がスーツを着用することに、どちらかというの良いイメージを持っている。また、男性がスーツを着用すると普段のイメージと変わると考えていることがわかるが、それはまさに、第二章で引用した酒井が言う「着て

びっくり脱いでがっかり」の制服観を裏書きする。

では、女性がスーツを着用することに対する反応はどうだろうか。「女友達がパンツ/スカートスーツを着用すると、普段より凛々しく女らしく見えるか」を尋ねた回答結果は、以下ようになった。

スーツに対するイメージや、考えによるt検定

	性別	N	平均値	標準偏差	t値
女友達がパンツスーツを着用すると、 普段より凛々しく女らしく見える	女性	80	3.00	.712	2.27 ***
	男性	160	2.63	.860	
女友達がスカートスーツを着用すると、 普段より凛々しく女らしく見える	女性	80	3.08	.671	3.37 ***
	男性	160	2.79	.786	

\*\*\*p<.001

女友達がパンツであれ、スカートであれ、スーツを着用すると、普段より凛々しく女らしく見えると考えている女子学生は、男子学生よりも多いことがわかる。女性には、スーツを着用することによって女性のイメージは変化すると考える傾向があるようだ。

第三部の結果をまとめる。女子学生は男性、女性の区別なく、スーツを着用することに対して良いイメージを持っており、スーツの着用・未着用で変化を大きく感じる傾向がある。それだけでない。女子学生は、スーツがそれぞれの性的個性を引き出すとも感じていると言えるのである。つまり、スーツには女性の服装では感じられないような要素、ホルンダーであれば「近代性」と呼ぶであろうもの、岩田は男性的要素（凛々しさがそのマーカーと言えるのではないか）、または社会的要素と呼べると考えるものが、着ている女性のイメージに付与されると主張する。要するにそれは「女性の社会進出」というイメージにぴったり合う服装なのである。20世紀当初のシャネル・スーツにあったイメージそのものなのだ。

それに対して、男子学生は、女性のスーツ姿には、パンツ、スカートを問わず、相対的に凛々し

さや女らしさを感じていないことがわかる。男性は、女性のスーツ姿に悪いイメージがあるわけではないだろうが、着用・未着用で変化を感じてはいない。なぜだろうか。岩田は、凛々しさと女らしさの二つの属性の対極的位置に注目したい。つまり、パンツであれスカートであれ、スーツを着用するという行為自体が、凛々しくはあっても女らしい行為とは考えられない、ということである。そういう傾向が男性のほうが高いということ、上の結果は示しているのではない。言い換えるならば、やはり、男子学生にとっても、スーツは「女性の社会進出」をどこかで反映しているファッション・アイテムであって、そのことに対して、ひいては女性の社会進出に対して、否定的なイメージを持っている、ということである。残念なことかもしれないが、そういうことをこの数値は暗示していると岩田は解釈する。

悪いことばかりではない。男子学生がパンツとスカートで有意な差異を認めていないということは、西洋における男装（パンツが主流になるはずだ）の「女の挑戦という古い色合い」を、彼らはほとんど感じていない、ということにもなる。それには、ひょっとしたら、袴姿という和服の伝統

という DNA が息づいているのかもしれない。

## 第4章 結論

これまでの、種々の検討の結果、本論は以下の結論を得た。

女性が就職活動時にパンツスーツの着用をためらう原因としては、「女性が男性の服を着用すると目立ってしまう」という西洋史的要因があると考えられるが、それが現在まで影響を及ぼす唯一の理由とは考えにくく、それを補強する要因があると本論は考えた。加藤が重視したのが、女性の影響である。アンケート結果からも、女性は日常生活レベルから同性を意識して行動していることがわかったし、文献からも「女性はお互いを監視し合っている」ことが確認できた。監視と言っても大げさなものではない。女性は、他人の少しの違いにとっても敏感、ということである。特に、いつも一緒にいる友達の変化にはすぐに気づく。例えば「今日の服装、いつもと違うね、どうしたの?」や「いつもとメイク・髪型、違うね」などは女性の間では、よくされている会話だ。そういう意味での監視である。

変化にすぐ気づくということは、人をよく観察しているということではないか。女性は、この様な世界で生活しているのである。したがって、あまり外れた服装をすると、何か言われたり、思われたりすると考え、目立った服装はしない。これを就職活動に当てはめると、周りの女性があまり着用しないパンツスーツは、着用しづらいのではないかと考える。スカートスーツの着用率が高いのは、周りの女性に服装を合わせているだけなのかもしれない。

ただ、これは女性だけの影響でもない。女性が、「この服装は、女性らしくない」や「スカートのほうが良い」と考えたり、そのような目線で同性を見る背景には男性の影響が確実にある。これは、女性に転移した男性の視線で、女性同士が監視し合っているということなのである。

岩田は、それに付け加えて、男性が意外にもパ

ンツスーツ姿を嫌悪していないことを特筆しておきたい。そこからは、先ほども述べたような袴姿の伝統を見る必要もあるが、本論ではそれよりも、西洋との違いに目を向けておく。というのも、それは、既に述べたような「女性の社会進出」に対する是認・否認の問題もあるが、日本の少なくとも男子学生は、女性のパンツ姿にさほど否定的ではないのであって、その意味であまり西洋的とは言えないからである。ところが、対照的に、就職活動時における女性のパンツスーツへのためらいは、それとは正反対の傾向、すなわち西洋における反応と軌を一にしているところがあるのだ。つまり、女性の自らのパンツ姿に対する視線は西洋的なのである。そういえば、自らの社会進出も日本では西洋的イメージ、すなわち「新しい女」とともに日本に現れた。

もしこの指摘に意味があるのであれば、女性は一体何に恐れて、パンツスーツをためらうのだろうか。岩田は、社会、あるいは上役の目ではないかと考える。女性の敵は上役に代表される会社という他者なのではないだろうか。少なくとも、同世代の男性ではないことを、この結果は暗示しているように岩田は思う。女性にとって、いや男性にとっても、真の敵は「世間」ということか。

## アンケートに関する反省点

最後に、アンケートについての反省点に触れたい。加藤は、アンケート結果が納得のいくものとならなかった理由として、早い時期から質問項目を完成させていたのにも関わらず、アンケート時期を考慮しなかった為、就職活動経験者からのアンケートを満足にとることができなかったことを挙げる。そのため、せっかく質問項目を、就職活動を行ったことのある男女、行ったことのない学生別に分けられるように組み立てておいたにもかかわらず、それを活かす分析ができなかった。また、人数だけをみて男女の比率を考えずにアンケートをとったため、女子学生からの回答数が男子学生の半分となってしまう、有意差が出たもの

の、男女による回答の差異に一層の精度を付与することができなかった。今後の課題としたい。

アンケートに関する事柄ではないが、岩田からも今後の問題点を挙げておく。それは、冒頭のホルンダーの引用関連で、女性の服装が男性のアイテムを取り入れると女の挑戦の色合いを帯びてしまうと指摘した後、彼女が次のように述べている点である。

これに代わって真の解決が見つかった。誰をも子どものように装わせるのだ。(236, 一部訳改変)

岩田は、この付言をととても面白いと思う。西洋と日本における女性のパンツ姿の社会の受け入れ方には、一定の差異があることはすでに指摘したが、確かに、最近の日本のファッションも、子どもと大人の間の服装に特段の差異化を図らない傾向と捉えることはできるような気がするからだ。この付言にあるように、それが「真の解決」を示唆する方向なのかどうかは、現段階で確約はできないが、それでも、男／女の差異を見いださない状況とは、ファッションに大人／子どもの差異を設けない傾向と同根という言い方はできるように

思う。そうであるのなら、ディズニー・ランドを大人も子どもも、女も男も楽しむように、「誰をも子どものように装わせる」とは、ホルンダーが言うようなユニバーサルな要素を有している可能性は大いにある。別稿に向けての要注意点としたい。

## 引用文献

- アン・ホルンダー、中野香織訳、『性とスーツ 現代衣服が形づくられるまで』、白水社、1997年  
小倉千加子、『オンナらしさ入門(笑)』、イースト・プレス、2012年<sup>(3)</sup>  
酒井順子、『制服概論』、新潮社、1999年  
諏訪隆志、『女子学生就職活動の秘訣』、成美堂、1997年  
「イブニングユース データウォッチング 雇用機会均等法の改正後根強く残る固定観念」、中日新聞、1999年11月1日  
「福井の理想の女性像は『家庭大切にする人』 商談所調査」、中日新聞・福井総合、1996年4月23日  
「ペーパーナイフ 制服談議」、中日新聞、2000年11月28日  
Jobweb「説明会で『服装自由』と言われたら本当に自由な服装で行っている? おおよそ100人に聞きました!」、<http://www.jobweb.jp/post/a-23277>、2012年9月28日アクセス  
RBBToday「約7割の女性が“ファッションは男子ウケより女子ウケ”」<http://www.rbbtoday.com/article/2009/09/28/62626.html>、2012年9月28日アクセス

**Abstract:** When Japanese female university students act for finding employment, they are supposed to wear jackets and skirts, not jackets and pants. What lies beneath this phenomenon? What sort of social constraints are working as the inconspicuous ideology which may cause us to feel it so natural? The aim of this paper is to clarify the reason using the following keywords below.

**keywords:** stereotype, ideology, standard, uniform, gender, modernity, male gaze, observation, accomplice, female advance into society, neck-tie, elegance, plain clothes, and kids' fashion

<sup>(3)</sup> 『女らしさ入門(笑)』のタイトルで、2007年に理論社より出版されている模様。



## 補足資料：社会調査質問票

本調査では愛知学院大学日進キャンパスに通う学生を対象とし、  
就職活動・日常生活での服装や考え、それに伴う行動についての意識調査を行います。  
この調査によって得た情報は、上記の目的以外には一切使用しません。ご協力お願いいたします。

総合政策学部 総合政策学科 08G084 加藤歩

### I. まず、あなたについてお尋ねします。

当てはまるものに○をつけて下さい。

#### 1. あなたの性別を教えてください。

女性 男性

#### 2. あなたの学年を教えてください。大学生以外の方は、年齢を記入して下さい。

1年生 2年生 3年生 4年生 その他（      歳）

#### 3. あなたは、現在、就職活動をしていますか？また、就職活動をしたことがありますか？

はい いいえ

はい と答えた 女性の方→ すぐ下の問題へお進みください。

はい と答えた 男性の方→ 8へお進みください。

いいえ と答えた方→15へお進みください。

### II. 次に、あなたの就職活動時の服装についての考えをお聞きます。

当てはまるものに○をつけて下さい。

I-3で、「はい」と答えた女性の方

#### 1. 就職活動で、企業説明会に行く時、どんな服装で行きますか？

パンツスーツ スカートスーツ 私服 その他（                      ）

#### 2. 就職活動で、面接試験に行く時、どんな服装で行きますか？

パンツスーツ スカートスーツ 私服 その他（                      ）

#### 3. 面接と企業説明会で服装を変えることは、当然だと思いますか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

#### 4. これまでに、面接はスカートで行くべきという話を、聞いたことがありますか？

1. はい 2. いいえ

4で、はいと答えた方

それに、違和感を覚えたことがありますか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる
5. 女性が就職活動をする時、スーツの種類（スカート、パンツ）によって、面接官の評価に少しでも影響がありますか？
1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる
6. パンツスーツで面接を受け、選考結果が不合格だった場合、服装のせいだと思いますか？
1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる
7. 就職活動の服装に迷った時は、周りに合わせれば安心だと思いますか？
1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

→Ⅲへお進み下さい。

I-3で、「はい」と答えた男性の方

8. 面接試験と、説明会に行く時では、何か服装を整える上で違いがありますか？
1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる
9. 女性が就職活動をする時の服装には、スカートとパンツの二つの選択肢がありますが、面接試験と他の選考では、服装を変えた方が良いと思いますか？
1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる
- 9で、1. とても当てはまる 2. 当てはまると答えた方にお聞きます。

どのような服装が好ましいですか？以下の選択肢から、それぞれ一つずつ選び記入して下さい。

スカートスーツ      パンツスーツ

面接の場合 ( )

説明会の場合（ ）

筆記試験の場合 ( )

10. 女性が面接試験を受ける時は、スカートスーツが好ましいですか？  
1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

- 1 1. 女性が面接試験を受ける時は、パンツスーツが好ましいですか？  
1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

12. 女性が面接を受ける場合、スーツの種類（スカート、パンツ）によって、面接官の評価に少しでも影響がありますか？
1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

13. もし、自分が面接官になったら、スカートかパンツどちらのスーツで来た女性の印象が良いですか？

1. スカート 2. パンツ 3. どちらも変わりはない

14. 就職活動の服装に迷った時は、周りに合わせれば安心ですか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

→Ⅲへお進み下さい。

I-3で、「いいえ」と答えた方
-----------------

15. あなたは、就職活動時、どんな服装で出かける予定ですか？

スーツ 私服 その他 ( )

16. 就職活動時、面接、説明会によって何か服装を変えるつもりですか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

17. 女性が、面接に行くときは、スカートスーツが好ましいですか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

18. 女性が、面接に行くときは、パンツスーツが好ましいですか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

19. これまでに、先輩などから面接はスカートで行くべきという話を聞いたことがありますか？

1. ある 2. ない

19で、1. あると答えた方にお聞きします。

それに違和感を覚えたことがありますか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

20. 女性の場合、スーツの種類（スカート、パンツ）によって、面接官の評価に少しでも影響があると思いますか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

21. 就職活動の服装に迷ったら、周りは気にせず、自分の行動しやすい服装で行きますか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

22. 就職活動の服装に迷ったら、とりあえず周りに合わせれば安心ですか？

1. とても当てはまらない 2. 当てはまらない 3. 当てはまる 4. とても当てはまる

→Ⅲへお進み下さい。

☆ここからは、全ての方が答えて下さい。

Ⅲ. あなたの日常生活での服装、行動についてお聞きします。  
当てはまるものに○をつけて下さい。

	とても当てはまる	当てはまる	当てはまらない	とても当てはまらない
1. 服装を選ぶ時、同性の友達がどう思うかを気にする。	4	3	2	1
2. 服装を選ぶ時、異性がどう思うかを気にする。	4	3	2	1
3. 服装を選ぶ時、誰がどう思うか気にしない。	4	3	2	1
4. 服装が女性らしくない友人を見ると、気になる。	4	3	2	1
5. 普段の大学生活で女性の目線を気にして行動することがある。	4	3	2	1
6. 普段の大学生活で男性の目線を気にして行動することがある。	4	3	2	1
7. 普段の大学生活で異性の目線を気にして行動することがある。	4	3	2	1
8. よく集団行動をする。	4	3	2	1
9. 集団で行動すれば、安心だ。	4	3	2	1
10. 人と少しでも違うと不安になる。	4	3	2	1
11. 女性は、男性に比べて自分の見た目を気にしていると感じる。	4	3	2	1

IV. あなたが、スーツについて持つ考えを教えてください。 当てはまるものに○をつけて下さい。	とても 当てはまる	当て はまる	当て はまらない	とても 当てはまらない
1. スーツは、今の自分をより良く見せる服装である。	4	3	2	1
2. スーツは、周りとは一体となり、目立たないようにする服装である。	4	3	2	1
3. 男友達がスーツを着用していると普段より凛々しく、男らしく見える。	4	3	2	1
4. 女友達が、パンツスーツを着用していると、 普段より凛々しく、女性らしく見える。	4	3	2	1
5. 女友達が、スカートスーツを着用していると、 普段より凛々しく、女性らしく見える。	4	3	2	1
6. 男友達が、スーツを着用していると、 普段（私服の時）より大人しそうに見える。	4	3	2	1
7. 女友達が、スカートスーツを着用していると 普段（私服の時より）より大人しそうに見える。	4	3	2	1
8. スーツを着用して、女性らしさを表現する必要はない。	4	3	2	1
9. スーツを着用して、男性らしさを表現する必要はない。	4	3	2	1
10. スーツを着用して、自分らしさを表現する必要はない。	4	3	2	1
11. パンツスーツを着用している女性は、挑戦的に見える。	4	3	2	1
12. スカートスーツを着用している女性は、挑戦的に見える。	4	3	2	1

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

